

令和6年度(2024年度) 学校評価総括表【伊丹市立 荻野小 学校】

教育目標		笑顔あふれ 明日も行きたい学校 ～かしこく あたたかく たくましく 自立して生きぬく児童の育成 ～						
重点目標		①学ぶ意欲にあふれ、自ら課題を見つけ、挑戦し、考え、解決する子ども ②相手の気持ちを考え、つながり、認め合い、温かい心で生活する子ども ③基本的生活習慣を身につけ、いのちを守る行動ができ、粘り強く取り組む子ども						
主要 施策	施策目標 基本施策	重点項目(案)	具体的施策(案)	達成目標(案)	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
知・徳・体の育成	「確かな学力」の育成 ①授業改善 ②誰一人取り残さない取組 ③学校・家庭・地域の連携	○既習事項を活用する 課題解決の見通しをもつ 課題を見つけ挑戦する ①個人の興味や関心、役割に応じて、学習の個性化を図るとともに、多様な集団で協働的に問題解決に取り組む授業作りをすすめる。 ②基礎・基本の確実な定着を図る。 ③家庭や地域との連携をすすめる。	・学ぶ必然性のある授業や教科横断的な単元学習の実施。 ・子どもの実態に応じた経験的カリキュラムの実施。 ・1人1回の校内公開授業の実施。 ・朝学習や補充学習、家庭学習における、基礎基本の定着と学力の向上の推進。 ・学年懇談会の実施や「家庭学習の手引き」の配布をとおした家庭学習の進め方の共有。 ・学校行事や各学年の学習に、地域の方が参画する機会を設ける。	・児童アンケート「生活科や総合的な学習の時間等において、自らすすんで友だちと協力しながら学習に参加している」において、参加していると回答した割合が90%以上になる。 ・学期に1回、カリキュラムチェックを実施する。 ・各教員が授業公開を実施する。 ・児童アンケート、「授業がわかりやすい。」において、わかりやすいと回答した割合が90%以上になる。 ・児童アンケート「家での勉強はできましたか。」において、できた(宿題・自主学習・読書など)と回答した割合が90%以上になる。 ・地域の方の参画による、学校行事や各学年の学習を進められている。	B	・児童アンケート「生活科や総合的な学習の時間等において、自らすすんで友だちと協力しながら学習に参加している」において、肯定的に回答した割合は89.8%と目標をわずかに下回る結果となった。授業については、教師が意識して、課題設定を行うことができた。 ・学期に1回のカリキュラムチェックを実施できた。各学年の実績が蓄積されてきている。 ・校内における授業公開は、概ね各教員1回程度実施できた。 ・児童アンケート「授業が分かりやすい」において、肯定的な回答は、93.3%と目標を達成することができた。また、保護者アンケートにおいても、同様の項目で、肯定的な回答が96.3%と高い結果となった。本校教員は児童にとって分かりやすくなるような工夫を凝らしながら授業実践をしているといえる。しかし、実際の学力には課題が残るため、児童の実感との間に差があるといえる。 ・児童アンケート「家での勉強はできましたか。」において、肯定的な回答は、95.4%となり、目標を達成することができた。しかし、児童の実態を見ると、学習の質、内容について、まだ課題が残っている。 ・地域と連携した行事や授業の実践については、各学年地域の方の参画によって、学習を進めることができた。	・引き続き、学期に1回のカリキュラムチェックを行っていく。 ・引き続き、積極的に授業を公開し合い、授業改善における研修の場を確保していく。 ・児童の実感が実際の学力に反映されるよう、授業改善を進めていく。 ・家庭学習の在り方については、懇談会などを活用し、引き続き、家庭学習の重要性や取り組みせ方について広く啓発していく。 ・地域が参画した行事や授業の実践について、HP等を活用しながら、本校の特色ある実践事例として紹介していく。 ・今後も地域とともにある学校の実現に向けた実践を積み上げるために、学校支援にかかる人材バンクを設けるなど、持続可能な取り組みにつなげられるよう働きかける。	・どの学級においても授業に様々な工夫が感じられ、これまでの取組の成果が現れているように思う。今後も引き続き、子どもたちが主体的に取り組む授業づくりを進めてほしい。 ・アンケート結果からは、ほとんどの項目において90%を上回っていることから、十分な成果が出ているのではないかとと思う。一方で、質問項目が数十年前からほとんど変わっておらず、現状に即していないようにも感じる。次年度は質問項目の見直しも必要ではないか。 ・アンケートを無記名にすることで、より正確に実態を把握することにつながると思う。 ・地域住民を招いた感謝の会での子どもの姿に疑問が残る。相手をもてなそうとする気持ちがあり感じられなかったことが残念である。必要なことはもっと指導すべきではないか。
	新しい時代に対応した教育の推進 ①情報活用能力の育成 ②英語教育の充実 ③デジタル化の促進	○課題解決の見通しをもつ 課題を見つけ挑戦する 多様な視点から考える ①情報活用の実践力、情報の科学的な理解、情報社会に参画する態度の育成。 ②英語学習に対する興味関心や意欲の向上を図る。 ③授業や学校の運営に関して、ICT活用の推進を図る。	・タブレットの操作などにおいて、情報活用能力を高める。 ・授業において、情報モラルや適切な活用を意識させる。 ・専科教員・ALT・JTEを活用し、コミュニケーションを取り入れた内容を行う。また、書く内容も取り入れ、英語力の向上をめざす。 ・ICT機器の活用を取り入れた、わかる授業の創造やタブレット端末を利用した学習支援の充実を図る。	・児童アンケート「授業の中でタブレット、スクールタクトを使うことができる。」において、肯定的に回答した割合が 80%以上になる。 ・会話を取り入れた活動やデジタル教材、ICTを活用することで、楽しんで、意欲的に取り組むことができる。 ・教職員アンケート「授業、校務において、ICT機器の活用を意識している。」において、行っていると回答した割合が80%以上になる。	A	・児童アンケート「授業の中でタブレット、スクールタクトを使うことができる。」において、肯定的に回答した割合が95.8%と目標を達成することができた。 ・1.17集会では、4年生がプレゼンテーションで発表をし、他学年に向けて、タブレットの効果的な活用方法を伝えることができた。 ・ICTの活用により、英語の発音練習や音楽に親しむなどの取り組みを行うことができた。 ・ALTの派遣により、様々な国の文化に触れる機会をつくることができた。また、書く内容も取り入れ、英語力の向上を行うことができた。 ・教職員アンケート「授業、校務において、ICT機器の活用を意識している。」において、行っていると回答した割合が100%となり、目標を達成することができた。児童、教員ともに、タブレットやまなびポケット等のICTの活用に、利便性や学習効果を感じていることが分かる。	・今後、さらにICTを活用していく力が児童・教員それぞれに求められる。そのためにも、研修を進めていく。 ・教職員間でのICTの使用頻度に差があるため、実践データを共有し、活用を進めていく。 ・専科教員、ALT、JTEを活用し、会話を取り入れた活動、発表の場の設定をする。	・近年、ICT機器が急激に普及して漢字なども覚えなくてもすぐに検索できたり、外国語等もポケット等があれば記憶することも無くなってくるのではないかとと思う。しかし、実際に書いたり活字に触れることも大切な学びの一つであることから、場面によって使い分けることが重要であると考ええる。

学校教育	調和のとれた児童・生徒の育成	「豊かな心」の育成 ①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての組織的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④体験活動等の実施	○他者に共感し寄り添う 挨拶・姿勢等の習慣をもつ 命を守る判断・行動を取る ①思いやりの心や規範意識等、道徳実践力の育成を図る。 自尊心感情を醸成し、人を大切に思う態度の育成を図る。 ②児童理解に基づく学級経営を行う。 いじめへの対応を早期に行う。 ③不登校児童への支援体制の確立。 ④校外学習などを通して、さまざまな体験や集団活動を実施する。	・道徳や人権の授業において、命や思いやりの心、規範意識等を大切に子どもを育成するために、考え議論する道徳科の授業を実施する。 ・異年齢の活動の場を設定する。 ・年に2回、アンケート調査を実施し、児童の声を聞く期間を設け、実態調査を行う。事例に応じて、職員全体で共通理解し、対応する。 ・不登校担当教員、不登校支援員を配置し、授業を進めながら不登校児童に対応できるようにする。また、不登校傾向の児童にとっての居場所として、おひさま学級を運営し、児童が安心して登校できるようにする。 ・児童の発達段階に応じたさまざまな経験をさせること、集団活動を通して、望ましい体験活動ができるように、計画・実施する。	・児童アンケート「自分にはよいところがあると思いますか。」「いろいろな友だちの良いところを認めて大切にしていますか。」「きまりを守って、ろうかを歩いていますか。」において、肯定的に回答した割合が80%以上になる。 ・アンケート実施後、各学年で児童の実態を共有し、今後の対応を検討する機会を設けている。 ・児童の実態を話し合う場を月1回以上設けている。 ・不登校担当教員を中心に、児童にとって過ごしやすい環境が整っている。 ・各学年において、日々の授業や校外学習などで、文化や自然に親しみ、公衆道徳を学んだり、望ましい体験をさせたりする機会を設けている。	B	・児童アンケートの結果について、肯定的な回答は、「自分にはよいところがあると思いますか。」80%、「いろいろな友だちの良いところを認めて大切にしていますか。」93.8%、「きまりを守って、ろうかを歩いていますか。」86.2%となり、目標を達成することができた。しかし、休み時間に廊下を走る姿がまだ見られるなど、実態が伴っていない部分がある。 ・生活指導目標を月に一回職員にも周知し、児童への指導を行うことができた。児童が振り返りを行う機会を確保し、振り返りと合わせて、次の目標を確認できた。 ・アンケート実施後、必要な場合には会を開き、情報共有、対応についての話し合いを行うことができた。 ・児童について、月に一回、職員全体での共通理解ができているため、対応が素早くできた。 ・不登校傾向がある児童が過ごす場所については、不登校担当教員がいることで、安定した「おひさまルーム」の運営ができている。不登校児童の人数については、増えていない現状となっている。不登校児童の様子については、一進一退だが、登校時間や回数が増えている児童もいる。改善を続けていくためには、来年度もこのような役割の教員が不可欠である。 ・体験的活動を意図的に組み込むことができた。体験をとおして、外部の方との関わり方などを知ることができた。	・道徳の授業の充実を引き続き図っていく。授業の中で、考え、議論するような話し合いの機会を設ける。そして、現実に起こっている事実と学習を結びつけるような流れをつくる。 ・生活指導においては、児童がきまりを意識できるように、教職員間で指導方法を共有し、統一感をもってすすめていく。 ・きまりや約束を守って過ごすことについて、全校児童が意識できるように、児童会や各委員会と共に、全校での取り組みを考え、実施していく。 ・生活指導担当、生活指導部会を中心に、児童の様子を共有し、相談できる場を今後も確保していく。 ・肯定的に児童をみとめることで、ほめる場面を増やし、児童の自己肯定感を高めていく。 ・体験活動については、今年度同様、意図的にカリキュラムへ組み込んでいく。	・不登校児童が全国的に増加する中、自校の状況を分析して、細やかに対応していると思う。一方で、自分で解決する力をつけさせることを目指すのであれば、学校現場における様々な支援が、時に手厚すぎると感じることもある。 ・自己肯定感をはかるアンケートの質問が適切であるかは疑問が残る。アンケートの実施方法や質問項目を自校の実態に即したものに変わっていくべきではないか。
		「健やかな体」の育成 ①児童生徒の体力向上の促進 ②魅力ある部活動の推進 ③発達段階に応じた健全な食育の推進	○挨拶・姿勢等の習慣をもつ 粘り強く活動に取り組む ①健康な体づくり・体力の向上 ②クラブ活動の時間の実施 ③望ましい食習慣の推進	・健康的な生活習慣を身につけさせるために、長期休業明けに生活リズムチェック表を活用する。 ・「ほけんだより」を用いた保健指導や保健委員会による保健広報活動を行う。 ・体育の授業を活用し、サーキットトレーニングを行う。また、毎週火曜日の休み時間に体育倉庫を開放し、運動習慣の育成を行う。 ・長なわ大会や荻野なわとび検定など、体育委員会主導で学校全体の活動を行う。 ・5、6年生を対象に、年間4回のクラブ活動の時間を実施する。 ・個々の児童が安心安全に、給食を食べられるよう、アレルギーについて、学級指導をする。 ・栄養教諭による「食の指導」を実施する。また、給食センターから送付される食に関する掲示物を掲示する。 ・給食委員会による広報活動を行う。	・「保健だより」を用いて、保健指導を月1回実施する。 ・生活リズムチェック表を2学期、3学期に実施する。 ・児童アンケート、「早寝・早起き・朝ご飯」など、規則正しい生活ができていますか。」において、できていると回答した割合が80%以上になる。 ・児童アンケート、「運動することやスポーツを観ることが好きですか。」において、好きと回答した割合が90%以上になる。 ・クラブ活動を実施している。 ・季節の食材を知ったり、栄養について考えたりする機会を設けられている。 ・食に関するクイズや豆知識を学校放送で伝えている。	B	・「保健だより」を用いての保健指導は、月1回実施することができた。 ・生活リズムチェック表を2学期、3学期に実施した。長期(14年間)にわたり実施し、提出率も3学期76.4%と落ちてきている。また、就寝時刻の後退、スクリーンタイムの長時間化が見られる。 ・児童アンケート、「早寝・早起き・朝ご飯」など、規則正しい生活ができていますか。」については、79.1%と目標を若干下回る結果となった。保護者アンケートの同様の項目では、肯定的な回答が91.7%となっており、大きな差が出る結果となった。 ・児童アンケート、「運動することやスポーツを観ることが好きですか。」については、80.5%と目標を下回る結果となった。 ・サーキットトレーニングについては、提案しているものの、活用し切れていない現状がある。 ・長縄大会や荻野なわとび検定など、学校全体の活動を行うことができた。 ・クラブ活動は、年間4回実施することができた。 ・食に関する指導や出前授業を活用して、食や栄養について考える機会を設けることができた。	・「早寝・早起き・朝ご飯」など、規則正しい生活ができているかについては、講演会等、外部とも連携して、健康の大切さについて呼びかける機会を増やしていく。 ・生活リズムチェック表については、長期休業明けに限定せず、ほけんだより等を活用して、日々の生活の中で指導し、定着を図るようにする。 ・スポーツテストの結果より、投げる運動を取り入れたサーキットトレーニングの充実を図る。 ・運動することについては、体育の授業や体育委員会主導の活動を行うことで、運動を楽しむことができる環境を整えていく。	・子どもたちの生活習慣の乱れはとても気になる。これは、家庭教育である。学校ができる具体的な方策として、校長から説明があった睡眠教育は意味があると思う。 ・身体を動かす楽しさを味わいながら、体力向上につながるような授業の工夫を、これからも取り組んでいってほしい。

教育相談・支援体制の充実 ①キャリア教育の推進 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの活用 ③教育相談の充実	○課題を見つけ挑戦する多様な視点から考える ①自ら課題を見つけ、考え行動できる児童を育てる。 ②児童や保護者の困り感に応じて、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを活用する。 ③支援の必要な児童のニーズ把握、個に応じた学びの場や合理的配慮の提供を行う。	・キャリアパスポートを活用し、振り返りや自己評価をすることで、新たな学習意欲を高めたり、将来の生き方を考えたりさせる。 ・学級での様子、児童の相談に基づき、児童の困り感を把握する。また、家庭訪問や懇談を通して、保護者の困り感を把握する。 ・児童理解のための情報共有を行い、支援について検討し、校内の体制を整える。 ・個別の支援が必要な児童については、困り感に応じて通級指導を行う。 ・特別支援教育支援員を活用し、一斉授業の中で個別のサポートを行う。 ・必要に応じて、個別の指導計画を作成し、児童の実態を引き継ぐ。	・年に2回、キャリアパスポートを記入する際に、各学年に応じて、自分の成長を確認したり、将来に向けて考えを記入したりする姿が見られる。 ・児童アンケート、「自分は、将来の夢や職業について考えている。」において、考えていると回答した割合が80%以上になる。 ・担任が聞き取った困り感について、学年や特別支援コーディネーター、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーと共有することができている。 ・教職員アンケート、「支援の必要な児童について理解を深め、合理的配慮や基礎的環境整備を意識しながらともに認め合い、支え合う授業・学級・学校づくりを進めた。」において、あてはまる、ややあてはまると回答した割合が80%以上になる。	A	・各学年でキャリアパスポートの活用ができた。 ・児童アンケート、「自分は、将来の夢や職業について考えている。」において、肯定的な回答は、83.6%と目標を達成することができた。しかし、高学年は肯定的な回答が減る傾向が見られている。 ・担任が聞き取った児童の困り間については、学年や特別支援コーディネーター、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの間で共有し、すぐに対応することができた。 ・教職員アンケート、「支援の必要な児童について理解を深め、合理的配慮や基礎的環境整備を意識しながらともに認め合い、支え合う授業・学級・学校づくりを進めた。」においては、100%と目標を達成することができ、昨年度からの改善を行うことができた。	・高学年になると、現実が見えるようになり、実際の職業を考えるようになるため、夢が持ちづらくなっていると考えられる。そのため、実際の職業について調べさせる機会をとったり、保護者や地域の人など身近な人から実際に働くことについての話を聞く機会をもったりすることで、自分の将来について考えさせるようにする。 ・担任が聞き取った児童の困り感をすぐに共有できる組織づくりをさらに進めていく。そして、必要な場合には、すぐに関係者につないでいくようにする。 ・児童の支援について検討したことをもとに、合理的配慮をどう行うか、ともに認め合い、支え合う授業・学級・学校づくりをどう進めるのかについて研修を行っていく。	・学校は家庭に寄り添い、十分に頑張っていると思う。 ・今後も、学校目標である「笑顔あふれ明日も行きたい学校」の実現に向け、取り組んでいただきたい。
特別支援教育の推進 ①伊丹特別支援学校の活性化 ②特別支援教育の充実	○他者に共感し寄り添う ①支援の必要な児童に対して、指導内容・支援方法の相談を行う。 ②共に生き、共に学ぶ、インクルーシブ教育の推進を行う。	・支援の必要な児童の困り感に対する手立てについて、伊丹特別支援学校のコンサルテーションを通して学ぶ。 ・交流学級を生活の基盤とする。 ・交流学級の担任と特別支援学級の担任が連絡を密にし、意思疎通を図る。 ・教職員に対して、特別支援学級の参観（授業公開）を行う。 ・特別支援学級の子どもたちの共通理解を図るために、研修会を行う。	・支援の必要な児童を含めて、すべての児童が学び合えるユニバーサルデザインの授業づくりを考えることができる。 ・児童アンケート、「学習や遊びで困っている人がいるとき、みんなで声をかけたり、助け合ったりしていますか。」において、していると回答した割合が 80%以上になる。 ・教職員アンケート、「特別支援教育校内委員会・校内教育支援委員会は、効果的に機能している。」において、していると回答した割合が90%以上になる。 ・教職員アンケート、「児童が安心して生活できるように学級担任とひろがり担任・通級担当等が連携している。」において、よくあてはまる、ややあてはまると回答した割合が90%以上になる。	A	・支援の必要な児童を含めて、すべての児童が学び合えるユニバーサルデザインの授業づくりについては、夏季研修を行い、全体で共有することができた。 ・児童アンケート、「学習や遊びで困っている人がいるとき、みんなで声をかけたり、助け合ったりしていますか。」において、肯定的な回答が82.6%と目標を達成することができた。肯定的な回答の中でも、「よくあてはまる」と回答する児童の割合を増やしていきたい。 ・教職員アンケート、「特別支援教育校内委員会・校内教育支援委員会は、効果的に機能している。」においては、95.6%と目標を達成することができた。昨年度からの改善ができた。 ・教職員アンケート、「児童が安心して生活できるように学級担任とひろがり担任・通級担当等が連携している。」においては、100%と目標を達成することができた。	・すべての児童が学び合えるユニバーサルデザインの授業づくりについては、今後も研修を続けていく。 ・支援を必要とする児童の人数が多い。今後も個別の支援を充実させていけるよう、教職員の研修や情報共有に努めていく。	・子どもたち一人ひとりに寄り添い、通級指導や特別支援教育を適切に行われている。来年度は弱視学級と難聴学級が新設される見込みであることから、引き続き、子どもたちの実態に即した取組を学校尾全体で進めていってほしい。
教職員の資質向上 ①研修等の充実	○教職員の資質向上をめざした多様な研修を行う。	・授業力の向上に向けた授業公開の実施や外部講師等の招聘、グループワーク等、それに伴う研修会の実施	・それぞれのテーマに応じた研修を年間複数回実施する。	A	・外部講師を招聘した研修の充実を図ることができた。 ・若手教員のニーズに応じて研修内容を計画し、学期に1回程度の研修会を実施することができた。 ・個々の授業改善や子どもの安全を守る体制の構築等、多様な種類の研修を実施することができた。	・各研修において、個々の反省を活かしながら、個々の資質向上を目指した研修となるよう、引き続き、計画、実施していく。 ・授業力の土台となる研修を随時実施していく。 ・研究担当を中心に、必要とされるテーマをとりあげ、自主研等を定期的に開催していく。	・職員が皆、前向きに取り組んでいるのが印象的であった。 ・研究や研修等についても、教師が主体的かつ熱心に取り組んでいる。

教育環境の整備・充実	学校を支える組織体制の整備 ①コミュニティ・スクールの充実 ②地域と学校の連携・協働体制の構築	①学校運営協議会の活動の充実を図る。 ②学校情報の積極的な発信を行う。	・学校運営協議会と教職員とのつながりを深める。 ・学校だより、学年だよりを発行する。 ・学校ホームページを更新することによって、学校情報を積極的に発信する。	・教職員の研修に、学校運営協議会委員が参加する、合同の研修会を実施する。 ・保護者アンケート、「学校は、学校の情報を学校だよりや学年だより、ホームページ等を通じて、保護者に伝えている。」において、伝えていると回答した割合が90%以上になる。	A	・教職員の研修に、学校運営協議会委員の皆さんに参加していただき、合同の研修会を実施することができた。 ・HAG訓練において、地域の方と関わり、学校の避難所開設について、情報共有できた。 ・保護者アンケート、「学校は、学校の情報を学校だよりや学年だより、ホームページ等を通じて、保護者に伝えている。」において、98.1%という結果となり、目標を達成することができた。	・今後も学校運営協議会との合同研修を行っていく。行事や学習への協力も引き続きお願いしていく。 ・これからも、情報公開の機会を増やしていく。	・もっと先生たちと繋がっていきたい。 ・来年度は教員も参加する形で学校運営協議会を開催してほしい。そのためには開催時間を15時半から行うなど、実施方法も検討してほしい。
	安全・安心な教育環境の充実 ①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設の整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進	①防災、安全教育の充実を図る。 ②登校指導を実施する。 ③交通ルールの説明、自転車安全教室を実施する。 ④安心・安全な学校づくりを行う。 ⑤教職員のやりがい大切にした業務改善の実施	・火災、防犯、地震の避難訓練を学期に1回実施する。また、不審者対応訓練を年1回実施する。事前・事後指導で身の守り方を確認する。 ・月に1回、校区の危険箇所立ち、児童の登校している様子を確認する。 ・警察の方に、自転車の乗り方や一年生への登下校指導をしてもらう。 ・長期休みの前などに、交通ルールについて、学校全体や学級でも指導する。 ・安全点検を月に1回実施し、学校施設や設備の安全・美化に努める。 ・労働安全衛生委員会を設置し、現場の声を聞き、業務改善を進めていく。	・児童アンケート、「避難訓練の時に、『お・か・し・も』のきまりを守って、自分で避難できますか。」において、できると回答した割合が90%以上になる。 ・登校の仕方で気になることには、すぐに対応し、全児童に指導することができる。 ・児童アンケート、「自転車に乗るときに、安全に気をつけることができますか。」において、できていると回答した割合が90%以上になる。 ・安全点検をもとに、児童が安全に過ごす環境を整えることができる。 ・職員の発案による業務改善を組織として行うことができる。	B	・避難訓練を学期に1回行うことができた。 ・訓練の際には、マニュアルに沿って、対応の仕方を考え、実際に行動することができた。昨年度の課題も事前に共有することで、よりよい対応を行うことができた。 ・児童アンケート、「避難訓練の時に、『お・か・し・も』のきまりを守って、自分で避難できますか。」において、98.1%と目標を達成することができた。 ・普段の登下校については、道を広がって歩いたり、横断報道のないところで横断したりするなど、一部ルールを守れていない児童がいる。 ・児童アンケート、「自転車に乗るときに、安全に気をつけることができますか。」において、89.2%と目標を若干下回る結果となった。児童の実態としては、数字以上に、安全意識について課題があるように見える。 ・労働安全衛生委員会の回数を重ねることで、業務改善を進めることができた。	・自転車の乗り方や登下校時の道路の歩き方については、荻野小学校区の地区安全マップや危険箇所の写真などを活用し、指導を行っていく。 ・保護者のみなさんや安全見守りボランティアの方々と児童の交通安全における課題を共有し、家庭や地域でも声かけをしてもらえるよう取り組んでいく。	・自転車で車道を走ったり、交差点で急に飛び出したり、公園で遊ぶ際にマナーを守っていなかったりする姿も見られる。今後も継続的に粘り強く指導して行ってほしい。 ・交通マナーについては、大人のマナーが大きな問題である。保護者への発信も必要ではないか。

学校関係者評価総括
荻野小学校では、職員が熱意を持って教育活動を行っており、職場環境も含め、概ね良好である。今後も地域の特性を活かしながら、地位や家庭、学校がつながり、子どもたちが笑顔で学校を楽しみと感じられる学校の実現に努めて欲しい。学校は普段から様々な課題に真摯に向き合い、一生懸命取り組んでいる。これからも教職員が疲弊しないよう良好な職場環境の実現に努めてほしい。

次年度に向けた重点的な改善点

①基本的な生活習慣・学習習慣の確立に向け、睡眠教育を中核に据えて教育活動全般を通して、児童への指導や保護者への啓発を推進していく。
②児童が主体となって取り組み、自己肯定感を高められる学習活動や学校行事の実践、「学ぶ必然性」を実感できる授業の実現に向け、職員研修や家庭・地域との連携を充実させていく。
③今後も引き続き、学校運営協議会の協力を得ながら、望ましい職場環境の構築に努める。

自己評価の基準 A: 目標を上回った B: 目標どおりに達成できた C: 目標をやや下回った D: 目標を大きく下回った